

認知科学的実験からみた『可能世界の類似性』

草野原也（北海道大学）

我々は、たびたび過去を振り返り、「もしも～だったら」という言葉を口にする。「もしも、枢軸国が勝っていればアメリカは分割統治されていたであろう」「もしも、ニクソンが核ミサイルの発射ボタンを押していれば地球は壊滅状態に陥っていたであろう」など歴史的な if から「もしも大学受験に受かっていればこんな予備校に通う必要はなかったのに……」などの日常的な後悔にいたるまで、その範囲は幅広い。哲学において、Lewis (1979)は可能世界の概念を用いてそのような反事実条件文を分析した。Lewis によれば、反事実条件とは、if 節において示された事象が局所的な物理法則の破れである「小奇跡」により起こった可能世界のうち、最も現実世界に類似した世界に対しての言及である。この考え方はベイズネットにおいて Pearl (2000)の Pruning Theory に引き継がれたが、『可能世界の類似性』という概念は捨象された。Pruning Theory に対立する考え方として、Hiddleston (1995)の Minimal-Network Theory がある。こちらは、if 節により示された現象は「小奇跡」ではなく、通常の物理法則に従って起きる。本発表では、Pruning Theory と Minimal-Network Theory を認知科学的な実験により比較した Rips (2010)の結果をもとに、どちらか一方の理論のみでは説明として不十分であることを示し、折衷案を考案する。折衷案として出されるのは、人間の認知モデルのなかで決定論的とされた場面では、Minimal-Network Theory を使い、確率論的とされた場面では Pruning Theory を使うというものである。このとき、人々がなぜそのような判断をするかという説明に『可能世界の類似性』という概念が使われる。この折衷案を使い、ルイスが出した反実仮想文の実例を再検討し、更に、応用として後悔の程度を考えるとこの説明が役に立つことを示し、『可能世界の類似性』が認知科学の分野で大きなヒントとなるかもしれない概念であることを論ずる。